



無名の語り

保健師が「家族」に出会う 12 の物語

評者・大田えりか 東京大学大学院生

今、地域社会で「家族」に何が起きているのだろうか。少子高齢化，核家族，虐待やネグレクト，家庭内暴力，精神疾患，引きこもり，アルコール依存症など，地域に暮らす人々の健康問題も複雑で，より深刻になってきている。地域社会の「家族」の問題は，助産師も理解を深めていかなければならない課題である。保健師の間で，最近話題になっている本を紹介したい。

本書では，自分たちの手で解決できなくなった経済，社会，教育など複合問題を抱え困窮する人々が，著者であり，保健師である宮本さんの前に相談者として現れる。その「無名の語り」との出会いから関係を構築し，ニーズの明確化，必要に応じた毅然とした介入，隠蔽された問題を引き出す直感や手腕は卓越している。法律や制度など，社会資源をつないだネットワークの構築など，どんな困難にもあきらめずひたむきに悩みながらも奔走する著者の姿が描かれている。

12編の物語は1章で1つの話が完結するようになっており，まるでテレビドラマを見ている感覚で，本のなかに吸い込まれるように読み終えた。ゴミ屋敷に住む兄妹救出大作戦，家庭内暴力に悩むエリート両親，ネグレクトに生きる兄と妹，機能不全家族の崩壊，難病家族の看取り，裏社会の女の生きざまという実話を，宮本さんと共に，腹を立てたり，喜んだり，反省したり，苦悩

事件は
現場で起きている！



宮本ふみ 著

定価 1,890 円(本体 1,800 円 + 税)

医学書院

しながら，地域での援助活動をリアルに追体験できる。

看護に正解はない。だからこそ，自分自身に真摯にこれ为本当によかったのかどうかと問い続ける。対象の深い理解をもとに活動を展開していく卓越さと，彼女の情熱がまわりに伝染しネットワークを育て地域のインフラとして根付かせていく姿は，芸術作品を見るようである。

文章は引き込まれるように読みやすく，プロの小説家を書いたのかと思った。宮本さんは新聞記者を目指して同志社大学文学部を卒業されているとのこと，その文才に納得した。その後，重症心身障害者施設に就職

し，看護職に進み，精神科病院に勤務した。宮本さんが保健師になったのは，34歳のときであった。51歳のときに進行性肺がんと診断され，やむなく地域活動の現場を退いた。5年間の闘病生活の間も，自宅に仲間を招いて地域保健活動の勉強会を続けた。

この本は，自分の体験を現場で協働した多くの仲間に残そうと命がけで綴ったものである。貧困や病気で苦しむ家族はこれからも増えていくであろう。地域における保健師の役割は大きい。今は亡き宮本さんの情熱は消えることなく，この本を通じて多くの人々に受け継がれることだろう。

地域で活動する人はもちろんのこと，病院でさまざまな家族に日々接している人にも，ぜひ手にして読んでほしい。